

『蒙疆文学』とは

蒙疆文芸懇話会の機関誌として、1942年6月傀儡政権「蒙疆政権」の首都・張家口で創刊。評論、詩歌、小説、随筆といった文芸作品はもちろんのこと紀行文、ルポルタージュ、現地事情といった社会・風俗・世相に関する記事も多く現地の地政、風土、農作物、資源などを詳細に調査・記録され、本雑誌によって文化運動の推進が図られた。



蒙疆文学



第二卷第三号
蒙疆文藝懇話会發行

オ ル ド ス	新 灣 子 行 古 城 堡 へ (陽高古墳發掘行)	▲短 歌 (大江 朝、高野たけし、中村洋子、迎山墨吉)	繪 と 文	▲俳 句 (武田豊水、河口句麿、深澤矢壽路、中野龍溪、金子龍石、小野誠仁)	▲大 同 俳 句 部 十 二 月 例 會
丹 澤 望 三 朗	武 三 朗	高 玉 輝 雄	春 日 ・ 城 壁	橋 口 三 郎 横 澤 宏	

表紙……………紙
トツカ……………深高王
……………澤玉
……………三雄
……………二欣

創 作	綠 山 莊	小 池 秋 羊
生 活	復 活 祭 ま て (第三回、完結)	八 雲 郁 重 林 田 芳 人
短 篇 小 説 選 評	蒙 疆 文 化 へ の 約 束	横 光 利 一
日 本 詩 魂 に つ い て	二 位 原 經 清	

蒙疆文学 第二卷第二号



昭和十年代の日本文壇における〈外地文学〉への関心／日本が蒙疆に抱いた〈異境趣味〉

詩	吾兒のうた	二 位 原 經 清
郷 愁	後 藤 輝	
雜 想	小 柳 折	
隨 筆	青葉の輝き	牛 村 義 久
日 々 片 々	赤 塚 欣	石 塚 壽 久 林 田 芳 人
黎 明 オ ル ド ス の 曉 鐘	大 樹 灣 蒙 民 移 遷 部 落 記	増 田 弘 道
蒙 古 民 族 の 口 傳		小 川 三 直
蒙 古 の 法 律		菅 見 武 夫
塞 北 の 鎮	(農村を往く二)	淺 地 央

創 作	纏足の頃	石 塚 喜 久 三
初 期 の 經 験	仲 田 六 郎	
鐵 橋 と 少 年	森 江 榮	
復 活 祭 ま て (第二回)	林 田 芳 人	
蒙 疆 文 學 賞 ・ 短 篇 小 説 ・ 入 選 發 表	上 泉 秀 信	
選 者 の 言 葉		
大 東 亞 文 學 に 就 て の 覺 書	小 池 秋 羊	
創 業 期 の 陣 痛	八 重 澤 光	

蒙疆文学 第二卷第一号

蒙古民族の口傳 (三) 橋口三郎

「それは丁度よい私共二人が仲よくたつた此の喜ばしい青の記念に私は二人の影がある。それで昨年暮になつたら二人を一掃にし、殺す神良くしませう」との事でゴング汗も怒りだす。

「それでは私共二人がもし此の子供達が大きくなつてしまふ内になつたら此の約束は本に代へます。誓書を交わします。私の腕とつらに閉り一つはゴング汗あなただけ持ち、一つは私が持ませう。」

「その子供は男の子ですか、女の子ですか。」

「男の子です。」との事だ。

ゴング汗は男の子を指さす。ゴング汗の口は、銀で飾りばかりだ。

死の街

横澤 宏

曾つて白哲の一言教師が、神の道を説いた沙漠の街を、けふは科学者が、せつせと砂を掘りかへしてゐる。

朔北の烈風が黄土をすくつて、すつぱりと埋葬して行つた砂丘の街を、けふも考古学者が懸命に穴を穿ちつゞけてゐる。

沙漠の涯でも、月が浮かんで、陽が沈む。

永い曆日の風化に崩折れた十字架の破片が、砂中から死の街への飛び石のやうに現はれる。彼は、不圖、指さきに貴重な學說を觸感して、とにかく額汗を拭く。

昨日と今日——過去と現在——築いても、盛りあげても、混沌と砂は崩れる。

蒙疆文学賞・作品募集

主催 蒙疆文藝懇話会
後援 蒙疆新聞社 蒙古政府弘報局

一、蒙疆文学賞は、蒙疆文壇の発展を期し、日本文壇に劣らぬものを書く者を奨励するものである。

二、募集期間は、昭和二十一年一月一日から三月三十一日までである。

三、募集作品は、小説、随筆、詩歌、評論、紀行文、ルポルタージュ、戯曲、児童文学、その他である。

四、募集作品は、原稿用紙に書き、表紙に「蒙疆文学賞募集」と書き、裏表紙に「〇〇〇〇〇〇」を記入し、封筒に入れて送付する。

五、募集作品は、原稿用紙に書き、表紙に「蒙疆文学賞募集」と書き、裏表紙に「〇〇〇〇〇〇」を記入し、封筒に入れて送付する。

六、募集作品は、原稿用紙に書き、表紙に「蒙疆文学賞募集」と書き、裏表紙に「〇〇〇〇〇〇」を記入し、封筒に入れて送付する。

七、募集作品は、原稿用紙に書き、表紙に「蒙疆文学賞募集」と書き、裏表紙に「〇〇〇〇〇〇」を記入し、封筒に入れて送付する。

八、募集作品は、原稿用紙に書き、表紙に「蒙疆文学賞募集」と書き、裏表紙に「〇〇〇〇〇〇」を記入し、封筒に入れて送付する。

「蒙疆」という秘境／「楽土蒙疆」

「蒙疆文芸懇話会」とは

蒙疆文学の確立を目指して活動した蒙疆文芸懇話会は、その前身を蒙疆詩人協会という。1940年春、少数の文学愛好者によって組織され、専ら詩の研究、発表、朗読等を行っていたが、翌年4月総合文化団体の拡大飛躍を目指す運動を開始。ここで文芸団体として「文芸懇話会」として公式の認可を得、その事業として、文化雑誌『蒙疆文学』の発行、他にラジオを通じて詩朗読、ドラマ放送等を行い、また蒙疆を訪れる文化人を囲む座談会を開催し、蒙疆文化活動の中核として活動。1942年より華文雑誌『蒙疆文学』を発行。なお、同会は本部を張家口市興亜大街和光荘内に、大同、厚和、包頭、宣化に支部を設けた。



報道隊の日記

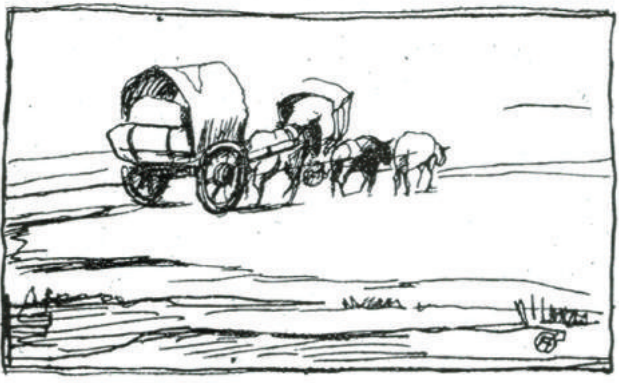
— 冀西前線にて —

青 木 啓

×月×日
一行が大団に苦いたのは午後一時、出遊へのトラックに積れると十五分ほど待たれて××隊の宿舎についた。荷物を置くに直ぐ部隊本部に申告に行。
營庭に並んだ隊員は、かややつ同じやうな服装に身を固めてしまふと、一見誰が新聞記者か、誰が作家か解らなくつてしまふ。かな一種に幼い、心持ちな顔になり、例達される指示を待つてゐた。
やがて本部の講堂に集められた隊員たちは互大尉から今度の状況を書く。

今度の作戦は共産地区としては積極的な組織と機能をもつ徹底的襲撃を目的とする。

共産地区としての此の地区の歴史は、支那事變当時日本軍北の地を奪ひ、山西省に進攻しようとしたとき、延安にあつて二十師が我々を阻止せんとする態勢をとつて北上して来たの状況を書く。



纏足の頃

石塚喜久三

食事中に李艶が幾度も水を飲み立つていつた。
風琴が
「李艶、何べん水飲み立つんだ。あんまり水飲んだら腹ばこはすぞ。」と叱りつけた。
「それだつて、姐さん(姉)がお前に小米粥(粟粥)の塩のこぼつかりもつてよこしたんだもの。」
興元がにやにや笑ひながら云つた。
「李艶、塩は薬だよ。お前さんの先生が云つたぞ。だから、お前よとこぼれ、あたつたんだぞ。」
李艶は口をとがらせながら
「それではお前、お前の食つてみる。お前、お前の塩辛くないところは食つてやるから。」と云つた。
「いやだ。いくら薬でも塩辛いのは、お前ごめんね。」
「ぼらみる。お前だつていやだ。口のなかかひんまがつてしまふぞ。」
風琴が肩に皺をよせて激しく云つた。
「よけいなこと云はないで食べ！」

石塚喜久三「纏足の頃」……
1943年1月号(2巻1号)に掲載され、1943年度「蒙疆文学賞」第一回入選作に選ばれ、更に第17回(1943年上半期)芥川賞を受賞。上泉秀信は「選者の言葉」(1943年1月号)において、「蒙古人、華人、その混血兒と、三者三様の特殊な感情を抱いて生活する様態が、極めて強い色調で表現されてゐて、捨てがたい味を持つてゐる」と述べ、横光利一は「選評」(1943年2月号)では、「蒙古といふものを、一眼で僕らに眺めさせてくれる所が、この作の価値です」と評した。この「纏足の頃」は、蒙疆或いは蒙古についてよく分からない「内地」日本人という読者の求める「蒙古らしさ」に応えた恰好の作品であった。なお本小説は、内地において発行の『文芸春秋』1943年9月号にも掲載された。

石塚 喜久三

1904(明治37)年生、北海道小樽出身。
1940年渡蒙し、華北交通張家口鉄路局に勤務しながら、蒙疆文芸懇話会の幹事を務めた。

大東亞文學に就ての覺書

小池 秋 羊

大東亞文學の範圍は東洋と西洋を包むものである。その範圍は文化の交流によるものである。……

蒙疆美術家協會研究所設立について

高 玉 輝 雄

……

花の海

石塚喜久三

この一編は大東亞文學が誇る数年前迄の蒙古草原の一断片の縮図である。

石塚喜久三

芥川賞誌上祝賀會

象をはかる

石塚喜久三

……

當選を祝して

落合 郁 郎

……

大東亞文學に就ての覺書

小池 秋 羊

……

「蒙疆文芸懇話会」の事業計画……

- (イ) 研究部 蒙疆地区内における蒙回各民族の文化史ならびに土俗学的研究、蒙疆地区の都市部落の立体調査
- (ロ) 企画部 現地民族に対する日語普及日蒙華人の文芸作品募集、講演会、映画会、座談会の開催、現地雑誌の出版刊行
- (ハ) 演劇部 蒙疆文化に対するラジオ放送、演劇公演

横澤 宏略 諸

明治三十八年四月二十四日 京都市に生る。

大正十一年 仙台第二中學校卒業。

大正十一年 族順、大連新聞社支局入社。大陸生活の第一歩を踏み出す。

大正十二年 家事の都合により歸郷す。



大正十四年 再度大陸に渡り、大連市満洲商業新報社編輯局に入る。

昭和六年 同紙發刊のため退社。帝國通信社大連支社編輯局に入る。

昭和七年 満洲日報(現満洲日日新聞社)編輯局に轉ず。

昭和十四年 満洲日本社編輯局學藝部副部长となる。

昭和十六年 大連満洲日日文化部長となる。

昭和十七年五月 蒙疆新聞社連絡部長として始めて蒙疆の土を踏む。八月「蒙疆文學」同人となる。十一月病状進み欠勤多し。

昭和十八年二月 北京にて入院加療す。三月末退院せりも欠勤のまゝ自宅にて療養の日を送る。蒙疆文學に「黄河に就ての手帖」(二月號)、「詩、死の街」(三月號)發表。四月始より更に病勢悪化し四月十日張家口察南病院に入院。四月十七日午後六時四十分永眠。享年三十九。